

二、資料A

中国の筆

中国の筆

— 蘇州湖筆製品目録 —

近年中国筆の輸入も増大化の傾向にあると伝えられており、わが国でもその愛好者がかなりいるものと思われる。ここに紹介される資料は、本町調査委員の一人である藤井千之助教授（元広島大学教授、現松山商科大学教授）が、中国訪問中にたまたま入手されたパンフレットの邦訳である。現代の中国筆の製造方法を直接うかがうことのできる貴重な情報のひとつとして、参照いただければ幸いである。

なお、邦訳にあたっては、客員研究員として広島大学学校教育学部留学中であつた譚艷群先生（中国華中工学院外国語系日本語研究室、講師）に多くのご援助をたまわつた。また、広島大学学校教育学部の大学院生であつた福原茂樹氏の尽力がなければ、おそらく、不可能であつた。

この紙面をかりて、これら関係者の方々に厚くお礼を申し上げたい。（文責、佐中）

金 鼎（商標）

蘇州湖筆製品目録

蘇州湖筆工場製

まえがき

わが蘇州湖筆工場は、一九五六年に創建された。一九六六年、蘇州東方紅筆工場と改名した。一九七三年に、蘇州湖筆工場の名品の伝統を保持するために、蘇州湖筆工場の名を回復した。

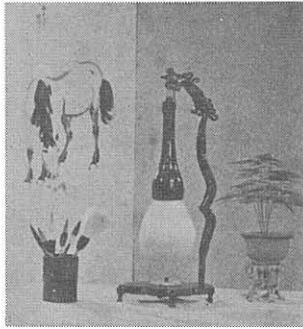
創建して二十四年、生産は不断に發展し、品質もますます向上し、筆の種類もどんどん増え、国内外の使用者の好評を博した。製品は国内、東南アジアでよく売れ、特に日本では歓迎されている。わが国の社会主義文化事業を發展させ、中国と外国との文化交流を促進し、國際貿易を發展させるために積極的な作用を果たしている。一九七九年の全国品質評定において、当工場の生産した“金鼎”商標の蘇州湖筆は、国家輕工業部から光栄にも“優秀製品”証書を授けられた。また金鼎マークの登録商標は、江蘇省工商行政管理局から“有名商標”という光栄な称号を命名された。各地



金鼎牌

苏州湖笔产品目录

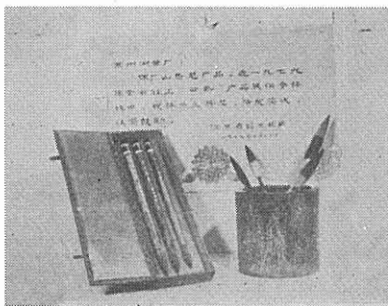
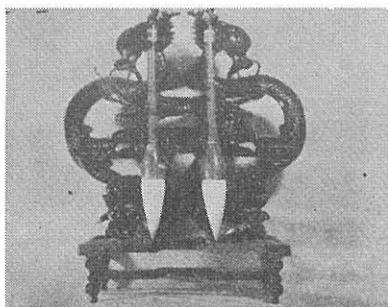
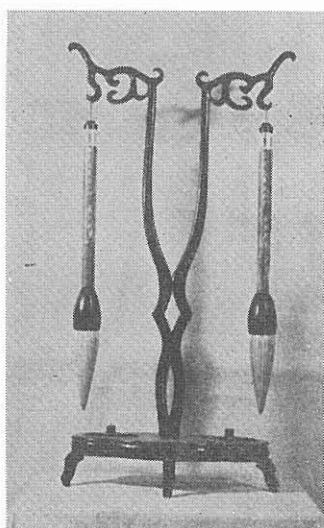
苏州湖笔厂出品



から製品購入の依頼がますます多くなり、手紙で製品目録を求める客は日益しに増えた。各界の要求を満足させるために、我々はこの「蘇州湖筆製品目録」を編集して、蘇州湖筆の歴史的沿革と製品の特徴について紹介した。目録中の品種は、わが工場で常に生産している高級・中級の湖筆で、並品はこの中に入っておらず、合計百八十五種類であり、買主と使用者は必要に応じて自由に選択購入するよう希望する。客に責任を負い、製品の信用と名誉を確保するため目録にある品種にはすべて金鼎というマークを付し、「蘇州湖筆」という文字を彫り、一律に三包（包退・包換・包修理）を實行する。（訳注：包退→返品保証、包換→交換保証、包修→修理保証。）

わが工場の製品の品質をさらに改良、向上させるために、各地の湖筆経営店、書画店、友誼商店、文物商店、工芸美術服務部および外国の業者の皆様は、貴重な御意見をお聞かせいただきたい。我々はさらに多くのさらによりよい品質の湖筆を生産し、国内外の市場に提供して、誠心誠意広範な書画家、書道愛好者のために服務し、日益しに繁栄する祖国の文化芸術事業のために服務し、四つの現代化実現のために貢献したい。

一九八〇年三月



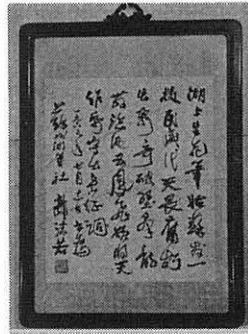
蘇州湖筆の簡単な紹介

毛筆は我が国の民族的特色を持つ伝統的な手工芸品で書道と絵画の主な道具である。毛筆の生産は全国各地で行われているが、その中で「湖筆」は最も有名で、微墨（訳注：中国・安徽省に出来る墨）、宣紙（訳注：中国・安徽省宣城県の紙、書画用に適す）、端硯（訳注：中国・海南島の端溪産の石でつくった硯）とともにその名が知られており、それらとともに「文房四宝」と称されている。

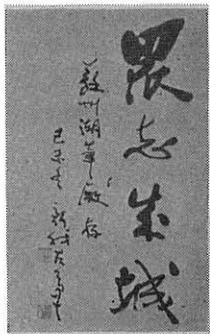
湖筆発祥の地は、浙江省呉興県善連鎮である。むかし、呉興県は湖州府に属していたので湖筆と称されたのである。湖筆は伝えられるところによると千五百年の歴史を持ち、我が国の貴重な古い文化財である。清朝の「道光」年間に至って、すでに呉興県から蘇州に伝えられていた。一九三七年以後、大勢の筆職人が蘇州へ移り、祖先の事業を継いで、筆作りで生計をたてていた。それ以来湖筆は蘇州の特産品となった。一九五六年に蘇州湖筆生産合作社が成立し、さらに拡張して蘇州湖筆工場となった。

蘇州湖筆の品種は比較的多く、二百数品種あり、大きいものは茶碗口ほどもあり、小さいものは刺しゅう針のようである。主として、羊毫、兼毫、紫毫、狼毫画筆、鴨毫、山馬筆の六種類に大別している。羊毫は、長江下流太湖沿岸でとれ

郭沫若同志の題詞



書家・費新我の題詞



書家・林散之の題詞

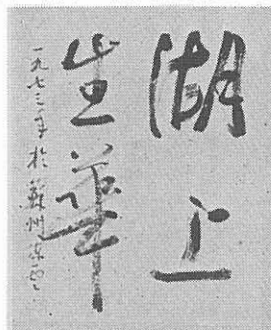
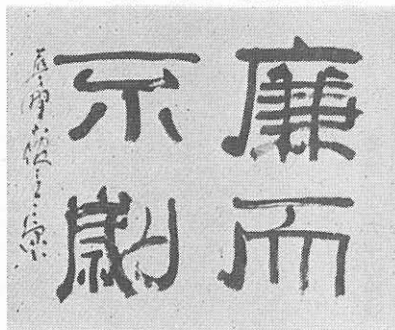


書家・王大中の題詞



るヤギの毛でつくったもので、その性能は柔かく、筆先は厚ぼったくなめらかである。兼毫は、安徽、江蘇省で産する野ウサギの毛でつくったもので穂先は尖ってまっすぐであり、運筆はなめらかである。紫毫は、野ウサギの毛のうちで最高級の毛を用い、色沢は黒くつやつやしており、先は柔かくまっすぐで、筆の運びはスムーズで思いのままである。狼毫はイタチの尾の毛を用いてつくり、我が国東北地方産の「関東遼尾」が最も良い。それは潤滑で弾力性に富み書にも絵画にも適しているが、絵筆を中心に種類も多く、各々特色を持っている。鶏毫は純白の鶏の毛を用いてつくるが、その性質は綿毛のように軟かくコントロールするのがむづかしいが、鶏毫筆で書いた字は、特別の風格があり、比較的高い芸術的鑑賞価値を持っている。山馬筆は馬の毛とその他の高級の毛を配合してつくる。筆の性質は剛強でまっすぐであり、狂草や絵画を書くのに用い、筆跡が枯れていっしょにも力強く、各地で高い評価を得ている。

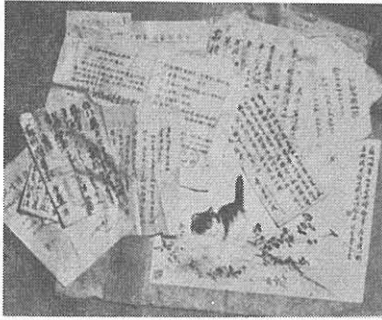
蘇州湖筆の製作技術はきわめて精巧で、無論、道具も操作方法もその他の地方と異なる。蘇州湖筆工場の職工は、伝統的な技術の継承の基礎の上に新しい改良と向上をおさめ、蘇州湖筆独自の芸術的風格を形成している。工程は大きく五つに分かれる。一、「水盆」は原材料の整理から半製品の筆先をつくるまで、そのすべての工程をずっと水を入れた容器の中で行うので水盆という。二、「扎筆」は結筆と



も言う。すなわち生糸で穂先の根元をしめて松やにで丈夫に結びつけて毛を落とさないようにする。三、「装套」とは筆先を筆の軸に取りつけキャップをかぶせることである。四、「扱筆」は俗に修筆とも言い、選沢・修繕の意味である。悪い毛を取り去って良いものを残し、それからにかわをつけて修理・選択し、整えて完成品にする。五、「刻字」とはすなわち筆軸に筆名と工場のマークを彫ることである。一本の湖筆の操作でも非常に細致で複雑であり、原料の整理から始まって、浸す、下ろす、くしけずる、分ける、ふるう、つなぐ、毛を選ぶ、配合など百二十余りの工程を経てやっと完成する。製筆労働者たちはどの工程もすべていささかもゆるがせにしないで丹念に操作し、五つの工程を密接に配合する。どのような工程でも少しでもおろそかにすれば、製品の品質に影響をもたらすのである。

蘇州湖筆の主な特色は、原料の選択が厳格である、技術が精細である、性能が多様である、種類がそろっている、ことである。内的な品質の面では、尖・斉・円・健の四大特色を持っている。「考槃餘事」という本には、「筆づくりは尖・斉・円・健を四徳とする」と書かれている。いわゆる尖とは、穂先のとがり具合が円維状であることを指す。斉とは毛の先端が刀で切った如くきれいにそろっておりふぞろいでないことである。円とは、筆の穂先がそろっておりまっすぐであることである。健とは書いたときに弾力があって、書き始めが枯れていて力

各地の使用者の蘇州湖筆に対する評価



強く、筆を置く時、筆先がまっすぐに立つことである。羊毫は穂先がはっきりととのっており、光白円直につくらねばならない。兼毫はタケノコのように形ずくらねばならず、善悪がはっきりしている。大別された六種類の製品は、それぞれの品質基準と特殊な要求を持っている。蘇州湖筆は正に「四徳」を兼備し、内と外がともに美しく比較的高い芸術程度に達していることによって使用者の多くに称賛され愛用されている。そして内外に名を馳せ、売れ行きは衰えない。

ここ数年間、蘇州湖筆工場の職工たちは、品質第一の思想を堅持し、技術をさらに高めようとし、新たな品質向上を計ろうと決心した。品質の全面管理を強化し、自検・互検・専任検査の三結合の検査制度を實行し、方法を検査し、不合格の原材料を生産に使用せず、不合格の生産品を工場から出さないことを堅持している。見習いを力を入れて養成し、悠久の歴史を持つ蘇州湖筆の後継者として若い世代の湖筆労働者を雨後のたけのこのようにすくすくと成長させた。現在、蘇州湖筆工場は十分な技術力を持ち、生産品の質も不断に向上し、生産も年につれて発展し、品柄も不断に増加し、全工場に活気あふれ栄える様相が現われた。正に郭氏が題詩中で云った「湖上で生まれた筆が、姑蘇で枝をつけた」という如く、浙江呉興を源として生まれた筆は蘇州で根を張り花を開きすばらしく輝かしいものとなった。

書家麦華三を招請して製品の鑑定を行う



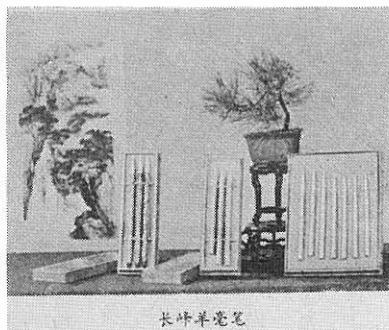
邀请书法家麦華三对产品作鉴定

書家費新我を招請して製品の鑑定を行う



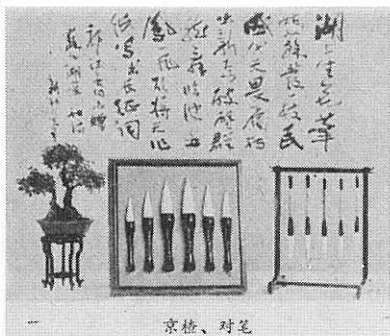
邀请书法家費新我对产品作鉴定

長峰羊毫筆



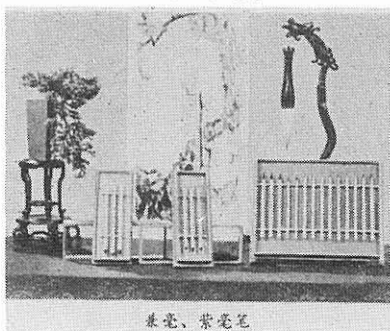
長峰羊毫筆

京極、対筆



京極、対筆

兼毫、紫毫筆



兼毫、紫毫筆

产 品 目 录

羊 毫 类

货 号	品 名		
1	大号顶峰	24	动
2	二号顶峰	25	最
3	三号顶峰	26	光
4	四号顶峰	27	荣
5	五号顶峰	28	大号纯羊毫京楂
6	六号顶峰	29	二号纯羊毫京楂
7	七号顶峰	30	三号纯羊毫京楂
8	大号盖峰	31	四号纯羊毫京楂
9	二号盖峰	32	五号纯羊毫京楂
10	三号盖峰	33	六号纯羊毫京楂
11	四号盖峰	34	神州朝晖
12	五号盖峰	35	湖颖佳品
13	六号盖峰	36	山岚挺秀
14	群	37	无上妙品
15	英	38	右军书法
16	毕	39	白鹤展翼
17	至	40	龙舞凤飞
18	精选对笔	41	春
19	玉版金丹	42	夏
20	大号玉笋	43	秋
21	二号玉笋	44	冬
22	三号玉笋	45	超品玉兰蕊
23	劳	46	玉兰蕊

47	兰蕊羊毫		兼毫类
48	白玉无瑕		
49	诗情画意	货号	品名
50	白雪阳春	77	东风万里
51	梦笔生花	78	七紫三羊
52	艺林珍赏	79	五紫五羊
53	极品长锋宿羊毫条幅	80	珊瑚玉树
54	极品短锋宿羊毫条幅	81	刚健婀娜
55	篆隶屏笔	82	选毫圆健
56	篆隶中书	83	写卷
57	挥洒云烟	84	双料写卷
58	冰清玉洁	85	极品写卷小楷
59	齐月光风	86	珠元玉润小楷
60	加料条幅	87	特制大七紫三羊毫
61	纯羊条幅	88	双料七紫三羊毫
62	唐笔	89	双料五紫五羊毫
63	精制长锋纯羊毫	90	九紫一分羊
64	珠元玉润	91	长锋九紫一分羊
65	汉壁		
66	大小由之		紫毫类
67	极品宿纯羊毫大楷	货号	品名
68	极品宿纯羊毫中楷	92	小楷紫毫
69	极品宿纯羊毫小楷	93	紫毫须眉
70	纯羊短颖小楷	94	五花紫毫
71	精品大楷	95	四花紫毫
72	精品中楷	96	极品双料摺笔
73	精品小楷	97	助人为乐
74	大号苍松	98	冬紫毫对笔
75	二号苍松	99	冬紫毫屏笔
76	三号苍松	100	特制长锋紫毫

101	长锋纯紫毫屏笔	128	小 蟹 爪
		129	大羊狼毫兰竹
	狼毫、画笔类	130	中羊狼毫兰竹
货 号	品 名	131	小羊狼毫兰竹
102	大 兰 竹	132	长锋冬狼毫大
103	中 兰 竹	133	长锋冬狼毫中
104	小 兰 竹	134	长锋冬狼毫小
105	大 写 意	135	一号豹狼毫
106	中 写 意	136	二号豹狼毫
107	小 写 意	137	三号豹狼毫
108	大 山 水	138	一号刚柔自在
109	中 山 水	139	二号刚柔自在
110	小 山 水	140	三号刚柔自在
111	大 花 卉	141	一号紫管
112	中 花 卉	142	二号紫管
113	小 花 卉	143	三号紫管
114	大 笃 叶	144	鹿狼人物
115	中 笃 叶	145	梅景书屋
116	小 笃 叶	146	书版画笔
117	加健大白云	147	紫白画笔
118	加健中白云	148	白毫画笔
119	加健小白云	149	狼毫钩筋
120	大 衣 纹	150	狼毫须眉
121	中 衣 纹	151	加制山水
122	小 衣 纹	152	翎毛花卉
123	鹿狼毫书画大	153	叶 筋 笔
124	鹿狼毫书画中	154	小 精 工
125	鹿狼毫书画小	155	花 鸟 笔
126	大 蟹 爪	156	钩 线 笔
127	中 蟹 爪	157	红 豆

158	素 描	182	大山马笔
159	羽 箭	183	中山马笔
160	豹狼毫联笔	184	小山马笔
161	豹狼毫提笔	185	山马线条
162	豹狼毫屏笔		
163	鹿狼毫对笔		
164	鹿狼毫联笔		
165	鹿狼毫小对笔		
166	欲将天作纸、写出长征词		

鸡 毫 类

货 号	品 名
167	极品鸡颖对笔
168	极品鸡颖联笔
169	极品鸡颖屏笔
170	极品鸡颖大楷
171	极品鸡颖中楷
172	极品鸡颖小楷

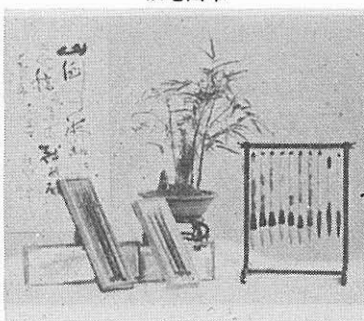
鼠须、山马笔类

货 号	品 名
173	大 鼠 须
174	中 鼠 须
175	小 鼠 须
176	特制大鼠须
177	特制中鼠须
178	特制小鼠须
179	大号鼠须对笔
180	二号鼠须对笔
181	三号鼠须对笔

老職人の廣宏海が技術を伝授している



狼毫画筆



湖筆の使用と手入れ

湖筆製品の寿命は、それ自体の品質以外に、使用者の大切な手入れと大変大きな関係がある。新しい筆を使いはじめるときには決してお湯に浸してはならない。

さらに、口の中で歯でかみくだいてもいけない。このようにすると毛が彎曲して開いてしまい使用寿命に影響する。

新しい筆を使用する時は、指で筆先を軽くやわらかくよじり、あるいは冷水を用いて軟かく浸し、筆先のかかわを溶かしてから書く。羊毫、鷄毫は全部ほぐしてさしつかえなく、兼毫、紫毫は三分の一ほぐし、狼毫はすべてほぐしても半分しかほぐさなくてもよく、用途にもとづいて決める。

毛筆は使ったあときれいな水で墨汁を洗い流し、指でこすってまっすぐにし、壁にかけるか筆たてに入れてかけ干しにして乾かす。墨汁を含んだ筆先を金属のキャップの中へ入れることは禁物である。筆先がくさって変質し毛がなくならないように、筆先は長い間墨汁の中へ浸しておいてはならず、いつも水気を含ませしめっぽくしておいてはいけない。

しばらく筆を使わない時は、虫が食うのを防止するために、少量の樟脳の粉をかけ、紙で包んだり、箱の中にしまい込んでもよく、しめることのないように、

若い世代の湖筆労働者が成長している



一、二カ月過ぎたら取り出して晒し、再びよく包んで乾燥したところへ置いておく。
上述のような手入れの方法に注意すれば、寿命を延ばすことができ、湖筆のもつ潜在能力を十分に発揮させることができる。

蘇州湖筆工場

住所 蘇州長陽巷一六号

電話 四一七二 五〇六七

三、

資料B

熊野筆にかんする史料

(資料一) 静流隼田翁碑

翁廣島縣安藝郡熊野村人父道籌長於筆札教子弟有年通稱源兵衛翁名道恒通稱松右衛門從父受書法業大進年十六歲已代父教子弟更師舊藩士書家小野某學所謂御門流者尤發揮其蘊奧名震遠通稱妙手翁教而不倦從弘化甲辰至明治癸酉三十六年如一日熊野村及近村入門者百數十人矣配結城氏前没男五人女人後更娶三宅氏翁温而雅善容人人皆敬愛之吉凶盛宴未會不請翁蓋其德自有高於人者不獨書法也茲門人相議欲建碑以報恩來請余碑銘余不散辞作之銘曰

筆札妙手 資性篤行

其德馨香 人皆愛敬

舊廣島藩儒 山田 養吉 撰

陸軍少將 佐藤 正 題字

広島県□□ 北村 三郎 書

(明治三十一年仲春建之、呉地八幡神社境内)

(資料二)

祖元筆毛
碑生先次為木々佐

佐々木為次先生ハ文
政五年九月四日屋號
城之堀事佐々木家ニ
生ル天保五年十三才
有馬ニ行キ毛筆製造
之技ヲ習得同九年十
七才ニシテ本村ニ歸
郷而シテ村民ニ此ノ
技ヲ教ヘ拡メ一生ヲ
終ル時明治十七年一
月行年六十三才

門人

向殿嘉石エ門建立

(昭和六年一月 城之堀区)

(資料三)

片川仁一郎君ノ製筆ニ心ヲ盡サレシ功勞多大ナルモノアリトシ有志者相謀リ君ガ功績ヲ石ニ刻シ後世ニ傳ヘ以テ同業者ノ奨励トナサント欲シ文ヲ予ニ囑ス予君ニ知アリ且ツ君ガ功績尤モ我ガ縣下ニ見ルベキモノアリ故ニ辭スルコト能ハス其梗概ヲ述ベントス

紀

父兼助君ハ明治初年ヨリ製筆販賣ノ業ニ從ヒ各地方ニ奔走シ需用ノ如何ヲ實檢シ十一年某日鹿兒島市ニ開店セリ兼助君五男一女ヲ有ス君ハ長男ナリ

念

次ニ彌一兼松明三盛夫一家和親春ノ如クニシテ皆業ニ從フ熊野村ノ製筆ニ於ケル只數ノ大ナルヲ以テ世ニ知ラレ其ノ優等品ニ至リテハ素ヨリ得意トスル所ニアラス特ニ優品ヲ製出スルコトアルモ熊野ノ名ニ因リテ稍輕視セラルル憾ナキ能ハス君之ヲ慨嘆シ自ラ東奔西走常ニ視察ヲ(マ)逐ケ製作上大ニ改良

碑

進歩ヲ期シ且ツ部下ヲ督励シ銳意事ニ當リ其成績顯著ナルモノアリ今ヤ出所ヲ問ハス至ル所歡迎セラルル此發達ヲ見シモノ即チ君ガ多年苦心ノ賜ト云ハザルヲ得ス鹿兒島ニアリテハ彌一君其他ノ令弟協力シテ兼助君ヲ佐ケ其勉強ト篤實トハ日ニ月ニ繁榮ト其トナリ縣下ハ勿論九州各方面ニ信用ヲ得名聲ヲ博セリ蓋シ亦君カ功勞與テカアリト云ベシ有志家君カ功徳ニ感シ此ノ美譽ニ出タルモノ豈ニ偶然ナランヤ

鹿兒島 小松文雄 撰

(明治四十二年八月、呉地区)

(資料四) 筆 塚 (自然石)

東洋独自の文化があり日本独自の書道がある実に熊野筆は力強くこれを支える

わが祖先は刻苦製筆の技を導入し子孫は町ぐるみの生業としてこれを高次化する
こうして高原の地に熊野筆が育ち今日市場は国の内外に拡がる

筆の生産は町民生活の主軸であり町民はこれに生命をつなぐわれわれは筆に

命あるを信じ祖先の遺徳の中に筆精をあがめようとする

ここに同志相集い天下に受容せられた誇りを刻み敬虔な感

謝と至情とを永遠にこの塚に託する。

内閣総理大臣池田勇人 書

(昭和四十年九月吉祥建之 榊山神社境内)

(資料五) 熊野毛筆元祖頌徳之碑

筆といへば熊野を思ひ熊野といへば筆を想ふ熊野筆の聲價は實に天下に冠たるものである。抑々熊野筆の由来ハ弘化の頃廣島市研屋町に淺野家御用筆司に吉田清藏なる人があつた時に井上治平ハこれについて製筆の法を學び又同じ頃乙丸常太も攝津の有馬から製筆の法を修得し何れも歸郷して村人達にこれを傳へたのがその起りである。

山間で自給自足の出来なかつた一寒村ハ爾來農耕のかたはらこの副業に励んだその結果熊野筆の名ハ漸次人の知るところとなり遂に現在では全國毛筆製産額の八割を占める盛況を呈しその品質も亦著しく向上して所謂東京筆を凌駕する優秀品を出すまでに進歩し道の大家の絶賛を博するやうになつたこれは全く井上乙丸兩氏の功に據るもので時恰も熊野筆發生後百年に當るので郷民相謀り其の偉徳を頌へその功績を永く後昆に傳へるため熊野町商工會の名に於てこの碑を建てたのである。

昭和丁亥秋日 桂園井上政雄題

昭和二十二年八月之告 桂園井上政雄これをしるす

(榊山神社境内)

(資料六) 安芸郡風教誌 (大正四年発行)

実業功労者

乙 丸 常太郎
井 上 彌 助

本郡熊野村に於ける製筆事業は隣村矢野村に於ける製鬚事業と相俟つて、実に本郡及本県下に於ける資源の權威たらずんばあらず。蓋し之が起源は、今を去る五十六・七年前の事に属す。而して今其の元祖を尋ぬるに、乙丸常太郎、井上彌助の両氏に原くものゝ如し。

抑創業の当初は、技未だ熟せず勢亦振はざりしに、銳意技を磨き、熱誠業を励み、人を導き世を警め、孜孜として成功を期す。苦辛察するに余あるものありて存す。

既にして明治十年、初めて内国博覧会を開催せらるゝや、此の地西尾平助なるもの、自製の毛筆を出品し、正に入賞者の一員に列せらる。乃ち大に勢を得、爾来発奮砥礪、業大に振ふ。勢既に此の如し。乃ち今は其の製造戸数八百余、従業者一千五百余人。一ケ年の産額約二千百余万対、価格約三十万円を上下せりと云ふ。兩氏の余沢亦威なるかな。

書きしるす 筆のいのち毛 つきぬとも

つきぬは君が いさをなりけり

誰か又兩氏を徳とせざるものぞ

〔筆の町熊野誌〕昭和三十四年より転載

(資料七)

梶山先生之碑

先生諱直人姓梶山彌伊勢守家世為熊野村榊山
八幡宮社司資性率直而奉神最虔恪好學善書殊
巧草書流麗高雅頗有趣致遠近之子女就受教者
常滿門教授親切未曾見倦色明治廿二年十一月
廿七日病没享年七十有五有三男二女長男正美
嗣蓋在明治維新前小學之制未行之時而使閭村
之農賈能書尺牘錄簿冊日用無憾則實先生之賜
也令茲門人相謀各自捐資建碑於榊山勒其事蹟
之一端以傳不朽亦報本之微意也

從五位

黒川

稜 撰

西尾

平 書

(明治四十年十月建立 榊山神社境内)

(なお、この碑に刻んである門人は熊野村七十二人・本庄村五人。)

(資料八) 安芸郡風教誌の表彰文

安芸郡熊野村 七筆会

夙に志を村民和徳ノ開発、地方風儀ノ改善ニ注キ、図書縦覧所ヲ設ケ、新聞紙雑誌等ヲ備ヘテ村民ニ閲覽セシメ、或ハ時ニ講師ヲ聘シテ講演会ヲ開キ、又意ヲ産業ノ發達ニ留メテ製筆事業ノ改良ニ貢獻スル等、善行頗ル嘉スベシ。依テ本会々則第六條ニ依リ、茲ニ之ヲ表彰シ
金巻封ヲ贈与ス

明治四十五年三月三十日

広島県安芸郡斯民会長 従六位勲五等 吉田 頼 巳

(なお、七筆会のメンバーは、尺田徳太郎、和田虎吉、神鳥林右衛門、
工田旧七、城本穰一、藤田德行、藤林房吉の七人。)

『筆の町熊野誌』昭和三十四年より転載)